

「故郷を思う」

田中実

東京新潟県人会の故郷訪問旅行会に参加させて頂いたのは、平成十三年十月のこと、平成大不況が深刻な時でした。仕事に疲れた、たまには故郷を見に英気を養いに行くのもいいかと参加しました。世間は不況まっただなか、街はシャッター街となつていても、故郷は昔と変わらず自然を豊かに湛えていました。

三条工業高校を卒業し、名古屋へ就職したのは昭和四十四年のことです。家庭の事情で大学への進学は許して貰えません。ならばと始めから職業高校を選びました。三条工業高校化学工学科（現中央工業高校）です。勉強嫌いで見栄だけ一人前でした。三井東洋化学名古屋工業所は日本を代表する会社です。そういう会社に就職出来たことは奇跡に近いと気付いていませんでした。まだまだ自分の可能性は無限だと根柢の無い自信がありました。都会に出て成功して、故郷に錦を飾るんだ、真っ赤なスポーツカーにいい女を乗せて、

村の砂利道を土煙りを上げて「かっ飛ばしてやるんだ」と夢を見ていました。

一年間工場で働いて見て、このままこの会社で一生を終わるとしたら、いまここにいる先輩達のようにしかならないなあ、と思いました。自宅は同じ間取りの共同住宅、ニワトリ小屋から工場へ自転車を通う毎日が一生継続のかと迷いました。なんと不遜な考えかと、いま思えば冷汗が出ます。幼さに弾けていたのです。

勢いに任せて一念発起、建築の勉強をしようと思ひ立ち、東京は王子の中央工業校を受験しました。親に反対されるのは分かっていたので内緒で、なんでもかんでも事後報告です。親は相当に心配していたと思います。親に頼れないので入学金と一年間の生活費は自分で稼ぎました。バイトに明け暮れの日々、勉強はそっちのけ。しかし、強がりもそうそうは続きません。二年目からは設

計課題が山積みで卒業制作が手につかず。結局、親に泣きついて仕送りを頼みました。それで、何とか卒業出来たのでした。今は亡き親父に感謝の日々です。

建築家木川靖一の下で住宅・共同住宅・事務所ビル・病院等の設計及び設計監理の経験を積みました。三十六才の時に独立を果たし、一級建築士事務所の経営を軌道にのせて得意になっていたときでした。ムリな生活がたたり、胃の痛さに耐え兼ねて病院へ。検査結果は胃癌と診断され入院、胃の三分の二を切除する手術を受けました。四十九歳、人生の節目、五十歳になる一年前にオーバーホールするのもいいか、と考えました。

都会に出てシヤニムニ働いて、所に小さな家を建て、家族もみんな健康でそれなりに幸せな家庭を築くことが出来たと思っていたのですが、入院して考えてみると、どこか変だ、なんかおかしいと思うようになります。都会の空気は汚れていて、花粉症やアレルギーに悩まされながら、ストレスと闘っていたのです。癌は環境汚染とストレスが原因と分かりました。環境汚染や地球温

暖化問題は待った無しなのだと思ひきました。超高層の近代的な建物が海風を遮り、鉄筋コンクリートの建物や道路の舗装が熱せられてヒートアイランド現象を引き起こします。フロングラスによるオゾン層の破壊だったり、アスベスト対策であったり、シックハウスによる健康被害対策はどうなっているのか等々。建築設計を生業とする者として見過ごせない事態が次々に問題視されていきます。そういう時に東京新潟県人会ふるさと訪問旅行会に参加させて頂いたのです。

故郷は山も川も海も、自然が豊かでした。この旅行会は故郷の豊かさを再認識させてくれました。この豊かさがあればどんな不況であっても心配ない。この故郷の自然の豊かさは汚してはならないと思ひました。故郷はいつまでも清らかで温かくあって欲しい。都会のように破壊してはならないと思ひました。実家では長男が農業を継いで一人になった母の面倒を見てくれます。次男坊の私は、都会でもみくちやにされながらでも、やはり故郷を応援しようと思う今日この頃です。